

つくり手の生き方を売る



鑄金

鑄心工房

増田

尚紀

平成六年度に行なわれた山形県の伝統工芸品産業産地実態・意向調査報告書をみると、県内の伝統工芸品は四十二品目を数える。中でも置賜紬、山形鑄物、山形仏壇、天童将棋駒は国の伝統工芸品に指定されている。伝承されている工芸品の数の多さは、東北でも際立っている。

昭和十五年前後の、日本の手仕事の現状を述べた柳宗悦著『手仕事の日本』の中で著書は、山形を『手仕事の種類の非常に多い所で、おそらくは日本でも有数の地』と評している。手仕事の日本で紹介され、現在もつくり続けられているものは十数種類に及んでいる。

今回の調査当時、伝統工芸品を製造している企業数は五百四十三企業、従事している人数は千六百二十三を数えるが、従事者一人の小規模な産地が半数を占めている。生産額についても、年生産額が一億円を超しているのは七品目に留まり、五百万円未満は十二品目を数える。調査結果の生産現状をみると、「伸びている」が九・五％、「横ばい」、「衰

退している」、「急激に衰退している」、とを合わせたと九〇・五％になる。この数年間の経済状況を考慮すれば、さらに厳しい現状が予想できる。生産が伸び悩んでいる原因は、ライフスタイルの変化が消費者離れの最大の原因と考えており、PR不足、流通機構の問題も大きな要因と答えている。その対応策として伝統工芸館等の常設展示場、デザインなどの研究開発支援を行政に要望している。さらに後継者問題も重要な問題として取りあげている。人材確保が困難な理由について、産業としての先行き不透明が第一にあげられている。その対応策として、行政に対し伝統品づくりの体験施設、職業訓練施設での訓練を希望している。以上が調査報告書の内容であり、これらの問題点は全国各地の産地状況とも多くの部分で共通している。

それではこれらの希望する解決策をすべて実現したらどうであろうか。いくつかの問題点の解決の糸口にはなるかもしれないが、根本的な解決にはつながらないと私は思う。伝

統工芸産業に携わる人たちが希望するものは、施設を代表とする箱を求めており、実は最も大切なことは箱に納める中身であることに十分に認識しているのか疑問に思われる。つくられたモノは技術面においても、美しさにあっても、他には引けを取らないモノと作者には自負があることだろう。見方をかえて、あなたにとってそのモノは本当に使いたいモノですか？、自らの暮らしの中で自身のつくったモノを使うことにより快適な時間を過ごすことができますか？、の問いかけにどのように答えることができるかが、箱以上に大切なことである。工芸の本質は用の美である。ライフスタイルの変化で消費者離れが進み生産が落ち込んでいることを客観視するのではなく、自らのライフスタイルを自分らしく実践することが、現在必要とされるモノを生み出す力となっていく。手仕事は、モノという物質を売るのではなく、つくり手自身の生き方を売ること、と言い換えることもできる。従来は、問屋を主とする流通側からの

Value Sight 伝統工芸



依頼で、請け手としてただ造ってあればよかったのだが、現在は、問屋自体が力を失ってしまった。優れた技術があれば、仕事が来るという時代ではない。つくり手が自らのライフスタイルを通じて、自らの価値観でモノを創造することにより、共鳴する新しいニーズを生み出すことにつながっていく。生産規模が小さい故に、オンリーワンのブランドを創りあげることができる。

現代は情報化の時代、あらゆる情報が私たちの周りを飛び回っている。この時代において魅力ある商品は、必ずマーケットに届くと常々思っている。マーケットも、暮らしを豊かにする魅力的な商品を求めている。情報発信は、口コミからインターネットに至るまで、手立ては多様であり、新たな流通の可能性は広がっている。伝統工芸産業分野での、魅力ある商品は国内の他産地に留まらずにアジア、ヨーロッパをはじめとする地球規模でつくられた、良質で、デザインがおしゃれで、手頃な価格の商品が市場に溢れている。今は工芸品も国境を越えた競争の時代だ。

PR不足と答えているが、本当にモノ自体に魅力があるのか、自ら問い直す必要があると思う。後継者問題について、過去に陶磁器、鋳物などの分野に、県外から多くの弟子入り希望者が訪れたことを聞いている。しかし残念ながら、ほとんどは希望がかなえられなかった。意欲にあふれた若者は、貧欲に学びとって、この地を去っていくかもしれない。

そのことを恐れ、技術を盗まれるからと心配するが、所詮技術は盗むことによつて伝承されていく宿命をもっている。断わる理由を、指を折つて数える前に異質（異端）な人たちを迎え入れてみたらどうだろうか。こちらが学ぶところもたくさんあるかもしれない。私も全国の産地を訪ね歩くが、その地に根ざした伝統工芸に、各地

からの若者が熱心に携わっている姿を目にする。後継者のほとんどが、血縁の山形にとつて、異なる血は新しい創造に結びつくと思えることができる。

このように調査報告書の読み方を少し変えてみると、マイナスと思えることもプラスに発想できる。無いものを求めるのではなく、自分自身の足もとを見据えることで、多くの問題が解決できる。

地域の歴史、風土に育まれた伝統工芸は、地域を代表する優れた文化である。伝統工芸は、本来決して保守的なものではなく、その時代においては、極めて革新的なソフト、ハードを合わせ持ったものであったことは、時代を検証すれば明らかである。山形に伝わる伝統工芸産業が、外に向かって開かれることが、新たな伝統を創りだす一歩となることを確信している。

■増田 尚紀

「鋳心工房」

1949年静岡県浜松市に生まれる。大学卒業後、恩師である武蔵野美術大学教授芳武茂介先生のアシスタントとして5年間全国各地の地場産業のデザイン開発を手がける。1977年山形市に移り住み、20年間にわたり(株)菊地保寿堂にて自身のデザインによる『WAZUQU』ブランドを確立する。1997年独立し『鋳心工房』を設立。鉄、再生アルミニウム、ブロンズなどの素材を中心に鋳物のデザイン、製作、流通を一貫して手がける。『日本の美』展（フィンランド・レトウレティアートセンター）『現代美術とMutant』展（ニューヨーク近代美術館）『Japanes Studio Crafts』展（ロンドンV&A美術館）等海外出展多数。国際デザインフェア'85キース・グラント賞受賞。美術工芸振興佐藤基金第11回淡水翁賞受賞。第1回山形エクセレントデザイン・セレクション、エクセレントデザイン賞受賞、他多数。（社）日本クラフトデザイン協会会員。東北芸術工科大学非常勤講師。